

# ドラマ教育の手法を用いた多文化クラスでの 日本語表現教育の試み —意見文執筆活動過程で「それまでの世界」は対象化したか—

有 田 佳代子

## 1. なぜドラマ教育か、なぜ「それまでの世界」の対象化か

本稿で指すドラマ教育とは、俳優や演出家など演劇関係者育成を目指すものではなく、英米の新教育運動や児童中心主義教育の流れをくむ授業実践のための教育的アプローチである。単に知的な方法に訴えるだけでなく、身体性や感性、そして人間関係を重視し複眼的な視点の育成を目指すとされる。観客を想定した芸術作品作りである「プロダクトとしてのドラマ教育」も、また、観客を想定せず演じることによって学習内容の理解への深化をもたらすための「プロセスとしてのドラマ教育」の場合もある。J. ニーランズは、役割を「演じる」ことの教育的な意義を次のようにまとめている。①自分とは異なった立場の人（年齢・性別・時代・人種的／社会的グループなど）の視点や観点から、ある一つの状況を見ることができるようになる。②悲しみや憎しみなどの強い感情を、ドラマという安全装置のなかで安心感をもって経験することができる。③他者の気持ちを慮り、対話のなかで道徳的な結論を出すことが求められる。④ドラマは他者との調和による芸術形式なので、社会性やコミュニケーション・スキルを育成できる（ニーランズ・渡部 2009）。

このようなドラマ教育の技法を、言語教育としての日本語教育領域に持ち込もうとする理由は、次の2点である。ひとつは、ドラマ教育が全身と五感を使った有効なアウトプット訓練となることである。ドラマがインプット素材として使われる例はこれまでも多くの試みがあった。聴解力向上のためのドラマや映画鑑賞、会話教材としてビデオやシナリオを通した自然な会話表現を学ぶ方法論である。しかし、アウトプットとしてドラマを用いる実践例は、後述するように日本語教育領域において限られている。全身を駆使した協働的な学びとしての即興劇（improvisation）などを使った教材は、間違いを恐れったり、自意識がアウトプットの邪魔をする学習者にとって有効であると考えられる。

そして、もうひとつの理由は、言語教育に、母語教育か外国語教育か第二言語教育かを問わず、当該言語の運用力育成と同時に、学習者の人格形

成やアイデンティティ形成への関与が求められていることである。たとえば、M. バイラムは19世紀のドイツ人教育学者フンボルトの「外国語を学ぶことは、それまでの世界観に新しい見方を得ること」のこぼれを引きながら、外国語教育の最重要課題は「視点を変えて見ることのできる力と、当たり前とされていることに疑問を投げかけてみることのできる力を伸ばす」ことであると主張する。そして、「自分の価値観とは共存し得ないような他の価値観を理解でき共感できる力」、また、そのために自分の「価値観を少なくとも一時的にでも、保留してみようとする意志」の力を持ち、他者とかかわりながら社会に参加する「相互文化的市民性 (intercultural citizenship)」の育成が外国語教育の目的だとした (バイラム 2015 : p74, p217)。こうした言語教育としての外国語教育の目的は、ドラマ手法の教育への導入を推進する獲得型教育研究会 (渡辺他 2014 等) が目指す「全身を駆使して自らのテーマを探求するスキルを磨き、民主主義社会を支える開かれた発想と批判的理性を持つ自立した市民の育成」という目標と接続する。「全身で学ぶ」意義は、単に協働学習の体験だけではなく、複眼的な視点を自身の体と心とをくぐらせて理解した、世界史の進歩にかかわる市民の育成につながるという。

こうした理念を背景にしつつ、本稿で報告する実践においては、学生たちがしばしば自明のものと考えがちな、幼い頃からの日常的な生活実践のなかで作られてきた同質的な「それまでの世界」(国家意識、民族意識などのアイデンティティ形成にかかわる) を対象化し、拡充的に更新させたいと考えた。世界のあちこちで、憎しみの連鎖による破壊と殺戮が繰り返されている。わたしたちの周囲にも、近隣諸国との関係悪化についてのメディアでの取り上げ方、ネット上での偏った発言の応酬など、否定的で単純化された「他者」を作り出し、その反動で自分の集団内部の結束性や同質性を高めようとするような現象があふれている。こぼれの教室もしばしばそれと向き合わなければならず、学生が持つ他者へのステレオタイプが不毛な緊張や対立につながることもある。こうしたなかで作られたイメージに亀裂を入れ、共同体意識を刺激する「あたりまえさ」を問うことは、学生たちの「相互文化的市民性」、「民主主義社会を支える自立した市民」の育成につながるのではないかと考えた。

## 2. ドラマ教育の手法を用いた日本語教育についての先行研究

英語教育において、「楽しみ (fun)」のなかで言語を発達させながら社会性を高めようとするドラマ教育の手法は、長く実践されてきた。日

本の児童英語教育分野における外山らによる多重知能理論 (Multiple Intelligences: MI) に着目した教授法は、ドラマ教育との親和性が極めて高い (外山 2010)。また、英語教師でありドラマ教師でもある前述した J. ニーランズは、ドラマ教育の手法を体系化した (J. Neelands 2015) が、そこではしばしば社会問題が隠喩的に取り上げられ、英語運用力のみならず、多元的な価値観と議論のスキルを持ち多文化・多言語が共生する社会の実現にかかわろうとする市民の育成が目指されてきた。

一方で、日本語教育においては、縫部義憲の「劇化指導プログラム」(1991)、平田オリザらによる演劇的手法の理論や実践事例紹介 (2010)、中山由佳の「活動型学習」としての演劇作品作り (2012) など、日本語能力育成と全人教育的な人間性形成の双方を目指すドラマ教育の導入は試みられている。さらに、福島・飛田 (2015) では、英国での演劇教育理論を導入した小学校での日本語教育について報告したが、そこでは英国の初等教育における日本語教育は、「語学教育」ではなく「市民性教育」であるべきで、その手法の一つとして演劇的手法が有効であると主張した。そして、英国の初等教育で、必修科目として日本語を教える意義は、日本語運用力育成であるよりも、むしろ忘れてしまうことを前提とした「記憶のデザイン」であり、ケンカしない・馬鹿にしない・協力できるといった安全な社会を守る多言語多文化状況での実践的な文化能力の育成であり、自尊意識や達成感をもたらす教科であるべきだとする。

このように、日本語教育へのドラマ教育の手法の導入は試みられているものの、その数はごく限られており十分な実践と研究の蓄積があるとは言いがたい。言語運用力の育成と同時に (場合によってはそれ以上に)、よりよい自己理解と他者への尊重や寛容な態度を持ち、自立した市民として社会参加していく能力の育成を目指すとするドラマ教育の導入は、グローバル社会における日本語教育実践に、看過することのできない手法のひとつであると考えられる。そこで、本稿では、以下に示すように多文化状況の日本語表現クラスにおいて実践した、ドラマ教育の手法を用いた意見文執筆活動について報告する。

### 3. クラスの概要

本学 (敬和学園大学) の 2014 年度後期科目「日本語 II unit A / 留学生と学ぶ日本語表現 I」の、非母語話者 (9 名) と母語話者 (5 名) がともに学ぶ「多文化」の日本語表現クラスにおいて、ドラマ教育の手法を用いた意見文執筆活動を行った。2014 年度後期のコース (90 分×15 回) は、

「1. はじめに」で示した理念をもとに、次の二点を目標とするクラスとしてシラバスに提示した。①日本語文書の読解力と日本語による文章表現力の向上。②異なる文化的背景を持った学習者同士の相互交渉を通じた、自己理解他者理解の深化とコミュニケーションの力の開発。

授業は、次のような手順で行った。①日本語文書の読解→②グループでの対話→③クラス全体での対話→④初稿の執筆→⑤グループでの添削→⑥最終稿（1000字程度）の執筆→⑦相互評価。ドラマ教育の手法のひとつ「ホットシーティング」は、③クラス全体での対話において用いた。その詳細は、後述する。

以上のような過程を、コース中4回繰り返した。そして、以下に示す読解文の内容と意見文のテーマは、学生たちの身近な問題に引き付けられる、対立軸が比較的明確である、作られたイメージやステレオタイプに亀裂を入れるための引力（おもしろさ、読みやすさ）がある、かつ、「わたしたちの文化」や共同体意識を刺激する、という特徴を兼ね備えると思われるものを選定した。

	読解文の内容	意見文のテーマ
第1回	「剽窃の疑いで学位剥奪された中国人留学生」「米国で『潜在的盗作者』扱いされる韓国人留学生」「STAP細胞研究者の論文剽窃問題」(WEB記事)	レポート執筆時のコピー問題
第2回	「和歌山県太地町イルカ追い込み漁の是非について」(DVD視聴、先輩の意見文)	イルカ漁とイルカ食文化の是非 <sup>(1)</sup>
第3回	石田衣良「ぼくたちがセックスについて話すこと」(短編小説)	性的少数者への社会的圧力
第4回	安倍晋三『美しい国へ』より、姜尚中『愛国の作法』より	愛国心は自然な感情か

#### 4. 相互評価の基準

意見文の最終稿がそれぞれできあがった後、学生たちは相互評価を行う。そこでの評価基準は、学生たちにあらかじめ次のように示した。

- ①基礎的な内容を理解しているか、語彙、表記、段落の作り方は適切か
- ②既存の知識や情報との関連付けがあるか
- ③自分自身の生活や世界観などとの関連が書いてあるか

この評価基準は、スー・ヤング（2013）によるICEモデルを参考にした。ICEモデルとは、教師から学習者に「注入」される基礎的な知識、暗記す

べきことがらが「アイデア (I-idea)」、その基礎的知識 (Idea) をほかのことに関連付けられるかどうか「つながり (C-connections)」、そして、それをより高いレベルやほかの課題に応用できるかどうか「応用 (E-extensions)」であり、この3点を学習のポイントとして主体的で深い学びを引き起こそうとする。教師から「注入」される基礎的な知識や場合によっては暗記すべきことがら、また日本語の文書を書くときの一定のルールは、やはり大切である (I/①)。しかし、そうした「外側」からの知識は、そのままではテストが終わればすぐに忘れてしまいがちだ。学生たちは、その情報が自分にとってなぜ大切なことなのか理解できない、価値ある情報だと認識できない、テストで用いる以外に使い道のない情報だと思えば、忘れてしまうのは当然だからだ。そうした「外側」からの知識は、今まで学んできた他の概念やすでに持っている知識と関連付ける (C/②) ことで、新しい知識は定着し、またそこから新しいアイデアや創造性につながっていく。さらに「自分にとってどんな意味があるのか」「自分が今まで持ってきた世界観にどんな影響があるのか」という質問に答える (E/③) ことによって、他人事的一般論ではなく、自分自身に引き付けた説得力のある意見文になると考えた。

また、学生たちには、こうした説得力のある意見文を書く意味は、レポートや卒論執筆、就職活動時の小論文執筆などの「学校課題」対策としてだけに留まるものではないと繰り返し伝えた。つまり、生涯にわたって、職場や地域社会において自身と家族などまわりの人々を守るために「説得力のある正当な意見を主張する力」、「納得させて相手を動かす力」をつけるためのトレーニングをしているのだということを意識づけた<sup>(2)</sup>。

## 5. ホットシーティングについて

クラス全体の討論では、ドラマ手法のひとつホットシーティングを行った。ひとりの学生が「ホットシート」に座り、課題である読解文のなかの登場人物になりきる。他の学生たちはその人物に対する質問を考える。そして、架空のインタビュー、記者会見のように質疑応答していくという活動である。観客に見せることを想定した芸術活動（プロダクトしての表現活動）ではなく、「読み」「書く」ための議論を促す学習ツール（プロセス）としての表現活動であると言える。個人では考え付かない視点からの質疑応答を実際にその立場になって体験することによって、主張形成と問題解決のための能動的な機動力、少数者の立場への想像力、既存の規範への批判的判断力などの萌芽が育成できると考えた。

ホットシーティングでの仮想インタビューにおいて、質問事項を事前にグループ内で話し合っただけで準備した。最初質問を受ける当事者用ホットシートには、教員が座り演じた。そうしてやり方を示した後、学生たちがホットシートに座った。教員も適宜、質問者として議論に加わった。授業記録をもとに質疑応答の様子を再現してみると、たとえば次のようなやりとりがあった。

## 第1回：コピペ問題

### STAP 細胞研究者へ

Q：コピペが悪いことだと知らなかったのですか。

A：知っていました。でもわたしにとって外国語で論文を書くのとはとてもたいへんだったので、WEBで読んで共感した文章をそのまま書いてしまいました。

Q：コピペをしたら、バレるとは考えなかったのですか。

A：こんな小さな記事は誰も読まないから、絶対バレないと思いました。

Q：次に論文を書くときに、またコピペをしますか。

A：いいえ、こんなにたいへんなことになるということがわかったので、もう絶対にしません。ごめんなさい。

Q：今までの大学や大学院で、コピペが悪いことだという教育を受けてこなかったのですか。

A：勉強してきました。でも、論文を完成させることだけが大切だと思ってしまって、夢中になっていて忘れてしまいました。

Q：ほんとうに忘れていたのですか。

A：忘れていたというか、わざと思い出さないようにしていたかもしれません。

### 学位をはく奪された中国人留学生へ

Q：中国ではどのように論文の書き方を勉強するのですか。

A：たとえば孔子など先人のことばは、わたしたちみんなの遺産だから、特別に断らなくてもそのまま引用できると勉強しました。（この応答に対して別の中国人学生たちのなかで「わたしは中国でそんなふうにならなかつた。引用は明記するように先生に言われた」、「わたしは引用方法について勉強したことがない」、「それはあなたが覚えていないだけ」などの応酬があった）

Q：コピペをしたのは、この論文がはじめてですか。

A：いいえ、初めてではありません。そのときに先生に何も言われなかったのが、今回もきっと大丈夫だと思いました。すみませんでした。

## 第2回：イルカ漁とイルカ肉食文化

### 太地町の漁師さんへ

Q：もしあなたの家のペットが残酷な方法で殺されるとしたら、あなたはどんな気持ちになりますか。

A：それは考えたくないほど嫌です。でも、イルカ漁はわたしたち家族の生活を支える大切な仕事だから、ペットのことは別の問題です。

Q：あなたたちの行為によって、世界の人々から日本という国全体が「野蛮な国」と思われてしまい、他国の子どもたちが日本を嫌いになる理由になっていることを、どう考えていますか。

A：それぞれの国にそれぞれの伝統や文化があります。わたしはカンガルーを食べませんが、カンガルーを食べる国の人たちを非難したり軽蔑したりしません。子どもたちにも、それぞれの国の文化や伝統をお互いに尊重しなければならないことを大人からきちんと説明してあげてほしいと思います。

Q：でも、今は日本にとってとても大切な時期です。経済もあまりよくないし、原発や放射能汚染の問題もあるし、領土問題などもありますから、周りの国々とできるだけ仲良くしなければいけないのに、あなたたちの「イルカ漁」が国際関係を悪くする一つの原因になってしまっているのですよ。

A：わたしたちの仕事がほんとうに日本の国際的な立場を悪くしている原因になっているなら、それはとても残念です。でも、それはほんとうですか。世界中全部の人たちが、わたしたちの仕事を「悪い」と思っていますか。

Q：とても多くの人たちが「悪い」と思っていますよ。イルカ漁を批判した映画はアカデミー賞を受賞しましたから。

A：しかし、わたしたちには自分と家族を守るために、自分の仕事を続ける権利があると思います。

Q：日本は豊かな国ですよ。別の仕事はいくらでも探せばあるはずです。

A：職業選択の自由は、憲法で守られています。

Q：だからといって、泥棒になったりヤクザになったりすることまで認められていませんよ。

A：わたしたちの先祖代々受け継がれてきた大切な仕事を、侮辱しないでください。

#### イルカ保護団体の人たちへ

Q：牛や豚を食べるのとイルカを食べるのと、どう違うのですか。

A：知能が違います。イルカは人間に近く、心の病の人にセラピーができます。そしてイルカ肉には水銀が含まれています。また、家畜と野生動物の違いもあります。

Q：もしあなたが自分の食生活を他国の人から野蛮だと言われたら、どんな感じがしますか。

A：たぶん嫌な気持ちになります。人の食事に文句を言わないでほしいと思います。でも、わたしはイルカを食べません。

Q：世界にはカンガルーを食べたり犬を食べたりする国や地域がたくさんあります。クジラ漁をしている国もあります。それなのに、なぜイルカ漁だけを非難するのですか。

A：イルカは特別です。カンガルーや犬はそんなに知能が高くないから、イルカとは別の問題です。

Q：カンガルーや犬だってかわいいし、人間になつきますよ。そして、殺されるときには「痛い、怖い、いやだ」と感じるかもしれません。それは豚や牛や羊も同じです。

A：それでは、木はどうですか。野菜はどうですか。果物はどうですか。植物だって「痛い、怖い、いやだ」と感じるかもしれません。そう考えたら、どこかで線を引くしかありません。

Q：あなたたちがその線を引く場所が、わたしには理解できません。なぜ犬とイルカの間に線が引かれるのですか。

A：将来は犬やカンガルーなども食用にすることが禁止されるかもしれませんが、今はとりあえずイルカが問題になっているのです。だから、わたしは目の前にある問題に対して反対を訴えているのです。

### 第3回：性的少数者の人権

#### 主人公であるゲイの少年カズヤへ

Q：両親には自分がゲイであることを話したのですか。話せますか。

A：まだ話していません。勇気がないですから。でももう少ししたら必ず話します。大事なことから、わかってくれるまできちんと話します。きっと両親はわかってくれます。

Q：ゲイであることで今までにどんな辛いことがありましたか。

A：一番辛いのは、自分の大好きな人に自分の気持ちを正直に伝えられないことです。迷惑がかかると思ったから。あと、「ゲイはきもちわるい」というのを親しい人たちが言うとき、辛いです。

Q：ダイくん（カズヤが好きになった男子中学生）のことを好きになって、ダイ君に迷惑がかかると思わなかったのですか。

A：彼に自分の気持ちを伝えるつもりはありません。彼は女の子が好きだとわかっていますから。だから、辛いです。でも、迷惑をかけているとは思いません。

Q：あなたに好きだと告白したのは、クラスで一番かわいくてやさしい女の子のイズミちゃんです。他の男子はみんなあなたのことをうらやましがっていました。そんなにかわいいイズミちゃんを、あなたはなぜ好きになることができないのですか。ほんとうにイズミちゃんにつきあうことはできないのですか。

A：僕はイズミちゃんのことを好きだし尊敬していますが、恋人同士になることはできません。それはイズミちゃんにうそをつくことだし、失礼なことだと思います。

Q：わたしが育った国ではゲイの人はもっと堂々としています。なぜ今までみんなに黙っていたのですか。

A：みんなに軽蔑されたり仲間はずれにされたり、両親に迷惑をかけたりすると思ったからです。でも、こうしてクラスのみんなに本当のことを言ったら受け入れてもらって、思っていたのとは逆にクラスの人気者になってバレンタインチョコも大量にもらってしまったので、とても良かったと思います。ゲイの仲間、自分のことを正直に話したほうが良いと勧めたいと思います。

#### カズヤに片思いされたダイへ

Q：カズヤの気持ちにまったく気が付かなかったのですか。

A：まったく気が付きませんでした。

Q：もしカズヤに告白されたら、友だちでいることができますか。

A：わかりません。たぶん、あんまりびっくりして避けてしまうかもしれません。でも、うれしいかもしれません。わかりません。

#### 第4回：愛国心は自然な感情か

##### 国を愛することは自然だと主張する安倍氏へ

Q：わたしは生まれた国では日本人と呼ばれ、日本では外国人と呼ばれます。わたしのような人に愛国心の教育はどうやってするのですか。

A：たしかにそうですね。自分の好きな方を選ぶほうがいいですね。でも、両方とも愛してもいいですね。どちらもすきじゃないというのはだめだと思います。

Q：わたしはウイグル人の人たちを、わたしと同じ中国人とは思えません。ウイグル人たちに中国の愛国心の教育は乱暴なのではありませんか。

A：ウイグルの人たちは中国人です。あなたの考えは理解できません。顔が違って中国語を話すし、中国人です。絶対に同胞です。

Q：わたしは国に一時帰国したときに、たまたま会った高校時代の友人から「日本になんか留学に行くなんて、裏切り者だ」というようなことを言われたことがあります。その友人は、とても愛国心が強く反日デモなどにも参加したようです。そして、日本に留学したわたしのことを「裏切り者」と言いました。とてもいやな気持ちになりましたが、そのことをあなたはどう思いますか。

A：そういう愛国心は間違っていますね。わたしは自分の国を愛したら、他の国のことも大切に思うようになると思います。あなたのその友人は間違っていると思います。

Q：でも、とても自分の国を愛しすぎると、他の国と比べていいとか悪いとか感じてしまいませんか。また、「敵」がいると、もっと愛国心が強くなるということもありますか。わたしは友人から、そんな感じを受けました。

A：ですので、それはあなたの友人が間違っていると思います。正しい方法で自分を国を愛していないと思います。その人が特別です。

##### 安倍氏を批判し愛国心は自然ではないと主張する姜氏へ

Q：ふるさとの自然を愛する感情と祖国全体の自然を愛する感情がどう違うのか、もっとわかるように説明してください。

A：ふるさとの自然は身近にあって実際に見てよく知っています。でも、国全体だと広すぎて実際には知らない場所がたくさんありますから。そして、日本は外国ですが、祖国の〇〇地域よりも新潟

のことはわたしはけっこうよく知っていて、好きです。

Q：わたしは将来、外国人に日本語を教える仕事に就きたいと考えています。そのときにわたしに自分の国への愛情や日本人としての自覚がなかったら、外国の人に自信をもって日本語や自分の文化を教えられないと思います。

A：自分のふるさとや自分の家族、友人たちを愛する気持ちは自然です。わたしも愛しています。でも、あなたは日本のすべての土地に行ったことがありますか。あなたはここにいる外国人の友人より、全然知らない日本人のほうが好きなのですか。

Q：そういう問題とは少し違うと思いますが。

A：「日本人」は、誰の事ですか。父と母、おじいさんおばあさんが日本人の人ですか。日本語を話す人ですか。

## 6. 「それまでの世界」は対象化したか：いくつかの痕跡

上述したようなクラス全体での議論のあと、意見文の初稿を書き、グループでのピア添削・教員からの添削をもとにリライトし、最終稿を提出した。この過程のなかで、当初持っていた「それまでの世界」が対象化され、拡充的に更新されたかどうかを検討したい。ここでは、意見文の初稿とリライトした最終稿、各授業の終了後に書いたミニツツペーパーにある所感文を資料として、それぞれのテーマごとに学習者によって表現された「変化」の痕跡について見ていくことにする<sup>(3)</sup>。

### 6.1 コピペ問題について

ここでは3つの記事（①当時話題になっていたSTAP細胞研究者による論文剽窃問題の記事、②剽窃の疑いで日本の大学から博士学位をはく奪された中国人留学生の記事、およびその留学生を擁護し大学側を非難する記事、③アメリカで「潜在的盗作者」扱いされる韓国留学生の記事）を読み、「レポートのコピペ問題」についての意見文を書いた。このテーマでは、「レポートのコピペは許されない」、「やっではいけない愚かな行為だ」と断言するもの、また一方で、「留学生の学位はく奪は厳しすぎる。大学はもっと教育的な対処をするべきだ」というものがほとんどだった。これらの意見文はそれぞれに思索のあとがうかがえるものではあったが、「それまでの自分の価値観」を対象化するまで内省しているとは言えず、担当者として十分な読みごたえがあるものではなかった。学生たちの意見文の内容から、レポート執筆時の剽窃や出典を示さない引用の禁止を再確認す

る効果はあったと考えられる。しかし、それまでの「あたりまえさ」を問い、自分の世界観を拡充的に更新させたかどうかという点については、多くの学生にその痕跡は見られなかった。

ただ、たとえば次のような意見文の記述は、価値観の更新や対象化とは言えないし、また一般化しステレオタイプを増長している危惧もあるものの、他の意見文が「許されない」、「愚かだ」、「改善すべきだ」と他者への糾弾を主旋律とするなかで、担当者としては、一定の評価をしたい意見文のひとつである。

「わたしの国では、コピペしてしまうことがよくある。学校の宿題でのコピペが、最も多いと思う。なぜなら、宿題はとても難しく、しかも大量にあり、それをやるだけで毎晩4～5時間もかかってしまうからだ。だから、多くの学生は他人の成果をコピペしてしまう。実はわたしにもコピペの経験がある。作文の宿題を与えられ、ネットで見つけた他人のものをそのまま写してしまったのだ。今回の記事を読んだり、みんなまで話したりして、今のわたしはとても後悔している。このやり方は、先生たちと自分に対してうそをつくことである。これはやってはいけない。道徳に合わない行為である」

また、③の記事に対して「欧米社会でアジア人が不当に差別されている」、「ほんの一握りの悪いアジア人だけを見て、他のすべてのアジア人も悪いと決めつけないでほしい」という意見文も、数点見受けられた。担当者としてはこの点も考察のポイントと考えており、ホットシーティングでの話し合いでは指摘されなかったものの、意見文で記述されていたことは一定の達成感がある。しかし、そうしたステレオタイプの視点が、自分の社会や自分自身のなかにもあるのではないかと言及しているものは、今回見当たらなかった。

## 6.2 イルカ追い込み漁の是非

ここではまず、イルカ追い込み漁を批判する映画「ザ・コープ」の予告編を見てから、以前の受講者が執筆した賛否双方の意見文を読んだ。そして、「イルカ追い込み漁の是非について」という意見文を書いた。

ホットシーティングのやり取りでもわかるように、教室外の社会での様相をそのまま反映した議論になった。それこそ「芝居じみた」ものではあったが、感情的なことばのぶつけ合いもあり、議論は平行線に終わった。そ

して、議論を経ても、もとの自分の意見が変化するという学生の意見文はなかった。

しかし、意見文の相互評価も終わったあとの最後の所感のなかに、次のような記述がみられた。

「(イルカの追い込み漁とイルカ食文化の是非について) わたしたちは正反対の意見にはっきり分かれた。あんなにかわいくて人の心がわかりセラピーもできるイルカを残酷な方法で殺して食べるなんて絶対にできないという人。豚や牛を殺して食べることでイルカをそうすることとの違いはまったくわからないという人。でも、男女や留学生日本人学生の別なく、賛成反対に分かれた。わたしの国にも犬肉を食べる地域があるが、そのお祭りの時期になると犬肉食文化について国内でも議論になる。こうした文化に対する意見は、性別や国籍とは関係ないことがわかった」

この学生が、国家や民族や性別などにまつわる同質性をそれまでは自明のものと考えていたとしたら、こうした気付きは「それまでの世界の対象化」という点から、一定程度評価し得るのではないか。

### 6.3 性的少数者への社会的圧力

この回ではLGBTの少年を主人公とした短編小説を読み、性的少数者の人権について意見文を書いた。小説そのものがよくできていて学生たちの興味を引いたということもあり、ホットシーティングでの議論も活発で、「この小説を読んで、みんなで話し合って、それで考え方が変わった」という記述が多くみられた。こうした点は一定の評価はできるものの、一方で「同性愛の人への差別はよくない」、「同性愛の人は誰にも損害を与えないから、幸せになる権利がある」、「同性愛者たちを公平に扱う必要がある」など、外側から注入された知識の表面的な理解にとどまり、いわば「他人事」として常套句を重ねたような意見文も多くみられた。

そうしたなかで、当初からLGBTの人々に対する批判や否定的な感情を表明していた学生Rの意見文と授業終了後の所感文を比べると、Rの「自明性」へのわずかな亀裂は確認できる。留学生としてのRは、現代社会における情報収集という点で、失笑を誘うほどの、あまりにも偏った稚拙な力しかもっていないと言えるかもしれない。しかし、実際のところ、Rほど率直に躊躇なく意見を表明してはいないものの、こうした「保

守性」、あるいは想像力の欠如は、場合によっては多くの学生に共通する点でもあるように思う。

#### 学生 R の意見文初稿

「同性愛者は許せない。わたしは男として、男の尊厳に損害を与える同性愛者を許せない。わたしの国では、それは次の理由で説明される。子孫を残せず両親への責任を果たせないこと。そして、家族や周りの友人たちに恥を与えること。だから、わたしは同性愛者たちに会えば、気持ちが悪くなると思う。男は男、女は女で、ルールは変えることができないのだ」

#### 学生 R の授業終了後の所感

「皆の意見文を読み、わたしと同国人の中に、わたしの意見とは違う人がたくさんいることに驚いた。単純な問題ではないかもしれない。わたしは同性愛者と友人になれないが、難しい問題だからもう少しくわしく調べてみなければいけないと思った。そして、同性愛者を否定する人は頭が固いという意見もあって、驚いた」

ここには、自分の「価値観を少なくとも一時的にでも、保留してみようとする意志」(パイラム 2015) の力の萌芽は、確認できるように思われる。

### 6.4 愛国心は自然な感情か

この回では、「愛国心は愛郷心の延長だから、自然な感情である。それは子どものころから教育において適切に育まなければならない」と主張する安倍晋三氏の著作と、それを引用しながら反論する姜尚中氏の著作とを、双方ともその一部を抜粋して読んだ。そして、二者のどちらかに対する意見文を執筆した。「愛国心は美しいものだと思うが、自然なものとしたらなぜ教育で教え込まなければならないのか」、「自然なものであるなら学校で教える必要はない」など、安倍氏の意見に否定的なものが多かった。しかし、今回の学習によって自分の価値観や見方が変わったと明確に述べているものは少なく、外国で暮らしたり異文化環境を比較的多く体験しているこのクラスの学生たちにとっては、日常的に直面する様々な場面のなかですでに思慮しつづけてきた問題なのかもしれない。そうしたなかで、次の意見文には「自身の変化」が比較的明確に表れている。

#### 学生 C の意見文最終稿

「わたしは自分の国を愛する気持ちは、とても自然なことだと考えていた。家族を愛するのと同じ、ふるさとを愛するのと同じ、それが拡大して国を愛することになるのだ。しかし、スコットランドの独立の住民投票を知り、わたしの国の少数民族も自分のことを自分たちで決める権利、自分たちの政府を作る権利があるのだと考えた。そうすると、私の国の少数民族の人たちは、私の国に対する愛国心を持つことはないだろう。〇〇国の国民は食べるものも十分なのに、自分の国を愛しているようだ。これは権力者による教育が原因だ。だから、愛国心は自然なことではない（傍線部は引用者による）」

ここで示されているスコットランドの独立に関する住民投票については、授業当時のニュースで大きく取り上げられていたもので、グループでの話し合いのなかで議論に現れたものだった。当該の教材とこうした他の知識との融合は、上述した「4. 評価の基準」で述べた通り、学生たちに新たな知の領域を与える非常に有効な機会になると考えられるため、そうした機会を意図的に設定できるような授業設計が求められる。

## 7. 今後の課題

多文化クラスにおけるドラマ教育の手法を用いた意見文執筆活動の過程で、学生たちの「それまでの世界」が対象化し得たか否かという点について、成果物としての意見文や授業後の学生たちの所感をもとに検討した結果、前項で見た通り十全とは言い難い。実践を振り返り改善のために今後の課題として言えることは、まず、ドラマ手法を取り入れた授業設計の再考である。今回受講した学生間の日本語運用力に差があり、ホットシーティングの実行には発言に大きく偏りがあった。もちろん発言が少ない学生も、意見文の分量や内容などから考えると仲間のやり取りから多くのことを学んでいる可能性は高く、ドラマ手法の有用性を否定するものではない。しかし、事前に質問事項をより時間をかけて十分に準備させるなどの改善策を施す必要がある。

また、たとえばイルカ追い込み漁のホットシーティングでのやり取りに典型的なように、学生たちが自分の主張に固執し議論が感情的になってしまいがちな点は、担当者である教員のファシリテートや授業設計に問題がある。活発な議論は、あくまでも双方の主張の根拠を知ること、そして、自分の意見に反対する人たちの立場に立って見て、そこから反対意

見の成り立ちの経緯を想像するということが目的である。こうした感情的で平行線の議論を避け、なんらかの妥協点を探りたい場合、あるいは、クラスの雰囲気や壊さずに、こうした政治的にもデリケートな問題を日本語教室で扱っていくために、どのような対策が考えられるだろうか。

ひとつは、さまざまな価値観への寛容が現代に生きるわたしたちには必要であること、そして熟考の結果、自らの立場や意見が「変わる」のはなんら不自然なことではなく、むしろ「勇気」を必要とすること、すなわち、冒頭で述べたような言語学習の意義を、できるだけ多くの機会にクラスで確認しておくことではないか。ある問題について、ひとつの立場からではなく、多様な立場からの意見や主張を知り理解することが、母語・非母語を問わず言語を学ぶことのひとつの重要な意義だということ。そして、さまざまな考え方があつて、そのうちのどれかを頭ごなしに否定する姿勢からは、友好や平和は生まれにくいことを、できるだけ多くの機会にクラスで確認し、そうしたいわば「教室内民主主義」と言えるようなものを、日常の実践のなかで醸成しておくことが、ひとつの対策としてあげられるように思う。かつ、デリケートで厳しい問題を考えざるを得ない場合でも、できるだけ気楽さ、気軽さ、楽しさなどを合わせ持ち、ユーモアを保ち「笑い」も起こるような活動として、組み立てる工夫もなされなければならないだろう。

また、今回用いたドラマ手法について述べれば、自分の本来の立場とは逆の立場としてホットシートに座ってもらうという工夫があるかもしれない。イルカ漁であれば、強硬に反対を唱える学生に太地町の漁師さんの役を演じてもらうというように。さらには、たとえば歴史認識問題が材料になったとき、日本政府の立場を中国人・韓国人学生が演じる、原爆投下の是非についての問題になったとき、アメリカ人学生に当時の日本人学生の役を、日本人学生にトルーマン大統領を演じてもらうなど、国際関係上の利害関係者がいる場合には、あえて自分と反対の役割を割りあてるという工夫は、自らの立場の客観視、「それまでの世界」の対象化に対して、ホットシーティングをより効果的なものにすると思われる<sup>(4)</sup>。

一方で、テーマの設定については一定程度評価し得る。本実践で取り上げ学生たちが検討したテーマは、上述した通りに次のような基準で選定したものだった。学生たちの身近な問題に引き付けられる、対立軸が比較的明確である、作られたイメージやステレオタイプに亀裂を入れるための引力（おもしろさ、読みやすさ）がある、かつ、「わたしたちの文化」や共同体意識を刺激する、という特徴を兼ね備えると思われるテーマである。

その基準に沿って4つの読解文と意見文テーマを設定したが、グループでのやりとりやドラマ手法を用いた全体での議論、また意見文の内容や分量などから、概ね「食いつき」がよく、活発な授業活動だったと評価できる。前述した通り、すべての受講者の「それまでの世界」が拡充的に更新したとは到底言いえないものの、しかし「勉強のしがいがある」「議論する価値がある」として、多くの学生たちに積極的な授業への参加傾向が見られた。

そして、今回の実践を振り返って特筆したいことは、複数国家にルーツを持つ学生たちの発言や、その存在そのものが周りの学生たちに与えるインパクトの強さである。このクラスには国籍・家族・文化的背景が複数国家にまたがる学生たちが2名おり、学生たちの議論が非常に「多文化性」豊かだったことに、彼らが大きく貢献していた。ナショナルアイデンティティの問題だけではなく、性的マイノリティー問題でもイルカ漁の問題でも、彼らの体験に根差した発言は、他の学生たちの「自明性」を直接に揺るがす力があるものだった。こうした複数国家にルーツを持つ学生たちは、本学のみならず近年全国の日本語教室に増え続けている。もちろん自分のバックグラウンドを隠している学生、「出自」について語りたがらない学生もいて注意は必要である。しかし、そうしたことを隠す必要がないような教室を作っていくことが重要であり、ハイブリッド性を自身の有価な資本として積極的に主張できる教室風土を作る責任は、教員にあると考える。

最後に指摘しなければいけないのは、ドラマ手法が日本語教育領域において有効だったのか否かを、より分析的に示す必要があるということだ。具体的には、①日本語運用力の向上という点で有効だったか、また、②バイラムの言う「相互文化的市民性」、渡辺等の言う「民主主義社会を支える自立した市民」の育成に有効だったか、という2点について、たとえばビデオ録画や参与観察記録によるリフレクション（内省）分析、授業後の自由記述アンケートデータのテキストマイニングなどを用いた分析を行う必要がある。今後こうした手続きを経て、日本語教育分野へのドラマ教育の手法の導入の有効性を提示したい。

（本稿は、2015年度日本語教育学会春季大会〔武蔵野大学2015年5月30日〕パネルセッション③山本冴里・新井久容・有田佳代子・南浦涼介「日本語教室に表れる「想像の共同体」は、どのように再構築していくことができるのか—三つの実践に見えた可能性—」での発表と議論を元とした。また本稿は、2014年度敬和学園大学人文社会科学研究所研究助成を得た

共同研究「演劇的手法を用いた総合的なコミュニケーション能力を高める将来の開発と実践」（研究代表者：金山愛子）の成果の一部である。）

---

## 註

- (1) 「イルカ漁の是非」については、有田（印刷中）に詳述した。
- (2) 意見文執筆の教育的意義については、有田（2014）に詳述した。
- (3) 研究倫理について言及すると、学生たちには、意見文および所感文は不特定多数の人々に向けて公開することを前提で執筆すること、また研究に使用する場合は匿名にして許諾を得ることを、事前に確認した。
- (4) これらの点についても、有田（印刷中）に詳述した。

## 参考文献

- 有田佳代子（印刷中）「第10章『地雷』はあえて踏んでみる—『地雷』が思考の壁をうち破る」  
石黒圭・五味政信編『心ときめくオキテ破りの日本語教授法』くろしお出版
- 有田佳代子（2014）「留学生・日本人学生混合日本語科目における意見文執筆課題の試み—「型」の習得と「想」の拡充・深化は両立しえたか—」『敬和学園大学研究紀要』23号
- J. ニーランズ・渡部淳（2009）『教育方法としてのドラマ』晩成書房
- スー・ヤング（2013）『「主体的学び」につなげる評価と学習方法—カナダで実践されるICEモデル』東信堂
- 外山節子・入江智子（2010）『英語の絵本活用マニュアル』コスモビア出版
- 中山由佳（2012）「ひとつものをつくる—演劇作品作りの現場としての日本語の教室から—」『早稲田日本語教育実践研究 刊行記念号』pp107-118
- 縫部義憲（1991）「演劇的手法を用いた日本語教育—学際的アプローチ—」『広島大学日本語教育学会紀要』1号 pp1-8
- 野呂博子・平田オリザ他（2010）『ドラマチック日本語コミュニケーション—演劇で学ぶ日本語リソースブック』ココ出版
- 福島青史・飛田勘文（2015.6.26）「英国の演劇教育理論を導入した市民性育成のための日本語教育—英国公立小学校での実践報告—」言語文化教育研究会 第33回月例会発表 早稲田大学
- マイケル・バイラム（2015）『相互文化的能力を育む外国語教育—グローバル時代の市民性形成—』大修館書店
- 渡部淳・獲得型教育研究会編（2014）『教育におけるドラマ技法の探究—「学びの体系化」にむけて—』明石書店

## 授業中の使用文献

- 「中国人留学生、論文盗用で早稲田大学の博士学位を取り消される = 1882年の創立以来初」 <http://www.recordchina.co.jp/group.php?groupid=78197>
- 「早大の中国人留学生に対する学位取り消しに異議 = 神田外語大教授「著しく不公平な決

定」 <http://www.recordchina.co.jp/a78225.html>

「小保方さん博士論文、20 ページ酷似 米サイトの文章と」朝日新聞デジタル . (2014 年 9 月 11 日閲覧)

「米国で『潜在的盗作者』扱いされる韓国人留学生」朝鮮日報

[http://www.chosunonline.com/site/data/html\\_dir/2013/05/19/2013051900021.html](http://www.chosunonline.com/site/data/html_dir/2013/05/19/2013051900021.html)

石田衣良 (2005) 「ぼくたちがセックスについて話すこと」『4TEENS』新潮社

安倍晋三 (2006) 『美しい国へ』文芸春秋社

姜尚中 (2006) 『愛国の作法』朝日新聞社